

研究 成 果 報 告 書

(国立情報学研究所の民間助成研究成果概要データベース・登録原稿)

研究テーマ (和文) AB		有害性災害廃棄物の行財政研究			
研究テーマ (欧文) AZ		Administrative and fiscal studies on toxic waste policies in serious disasters			
研究氏 代 表 名 者	カナ CC	姓)モリ	名)ヒロユキ	研究期間 B	2013～ 2014 年
	漢字 CB	森	裕之	報告年度 YR	2015 年
	ローマ字 CZ	Mori	Hiroyuki	研究機関名	立命館大学
研究代表者 CD 所属機関・職名		立命館大学政策科学部・教授			
概要 EA (600 字～800 字程度にまとめてください。) 本研究は阪神・淡路大震災および東日本大震災の被災自治体を対象として、アスベストをはじめとした有害物質を含む災害廃棄物に係る政策対応についての調査研究を行うものである。東日本大震災については今も復興途上で、福島県の瓦礫処理はこれから本格化していく状況下であり、今後も継続的な研究調査活動と成果のとりまとめと発信を行っていくものであるが、本助成における研究成果およびその発信に至ったのは次の 2 点となる。 第一に阪神・淡路大震災における有害性災害廃棄物(粉じんおよびアスベスト)の処理に係る対策状況や現在までの健康影響に関する検証(森裕之による研究発表)および住民アンケート調査の実施およびその集計・分析結果の発信(南慎二郎による研究発表)である。特にアンケート調査については、震災発生から倒壊建築物等の震災がれきの解体撤去が概ね完了するまでの期間に被災地で生活していた人を対象に、生活周辺での当時のがれき撤去作業の実施状況や大気中の粉じんの印象、呼吸器系の健康不調・病気の有無などを質問した。その結果、震災からの復旧期間における大気汚染の高まりやそれに起因する健康影響の実態が明らかとなった。9 割の人ががれき作業の周辺で通常より粉じんの多い環境で生活していた経験を持ち、半数以上が将来の健康不安を抱いている状況にあった。さらに現在の健康状態について、呼吸器系の健康不調・疾患が 1 割、アスベスト関連疾患が 1%という結果であり、精神的・肉体的損失としての、震災当時の廃棄物処理に起因する大気汚染の長期的影響が考えられる。 第二に国際学術会議(立命館大学「日中韓・アスベスト国際会議」、2015 年 3 月 7～8 日開催)としての講演プログラムにおいて、震災時まで含めてのアスベスト災害対策についての現状と課題について報告を行った。東日本大震災での災害廃棄物処理とアスベスト飛散問題の動向を念頭におきつつ、今後の被害発生リスクの把握と被害予防を重視しての政策課題やリスクコミュニケーションのあり方について、現状分析からの整理を行った。さらには建築学や建設労働者の健康被害状況や、自治体でのアスベスト対策の現状の側面からの整理も行った。以上の現状の概況を整理しておくことで、今後の調査分析の上で新たに解明できる点や政策展望をより明確にできることにも寄与するものである。ここでの報告内容については雑誌論文や図書により今後まとめていく予定である。					
キーワード FA	災害廃棄物	震災復興	アスベスト	健康影響	

(以下は記入しないでください。)

助成財団コード TA					研究課題番号 AA								
研究機関番号 AC					シート番号								

発表文献（この研究を発表した雑誌・図書について記入してください。）									
雑誌	論文標題 ^{GB}	震災アスベスト - 潜伏する復興災害							
	著者名 ^{GA}	森 裕之	雑誌名 ^{GC}	大震災 20 年と復興災害(書籍)					
	ページ ^{GF}	78~81	発行年 ^{GE}	2	0	1	5	巻号 ^{GD}	
雑誌	論文標題 ^{GB}	市民アンケート調査詳報							
	著者名 ^{GA}	南慎二郎(共同研究者)	雑誌名 ^{GC}	アスベストリスク 阪神・淡路大震災から 20 年 (書籍)					
	ページ ^{GF}	152~172	発行年 ^{GE}	2	0	1	5	巻号 ^{GD}	
雑誌	論文標題 ^{GB}								
	著者名 ^{GA}		雑誌名 ^{GC}						
	ページ ^{GF}	~	発行年 ^{GE}					巻号 ^{GD}	
図書	著者名 ^{HA}								
	書名 ^{HC}								
	出版者 ^{HB}		発行年 ^{HD}					総ページ ^{HE}	
図書	著者名 ^{HA}								
	書名 ^{HC}								
	出版者 ^{HB}		発行年 ^{HD}					総ページ ^{HE}	

欧文概要^{EZ}

The purpose of this study is investigating measures for waste disposal with harmful materials such as asbestos in serious disaster through case studies of The Great Hanshin-Awaji Earthquake in 1995 and The Great East Japan Earthquake in 2011. In this term, we have implemented and released two study results.

First, we carried out a research by the questionnaire as to the actual condition of The Great Hanshin-Awaji Earthquake just outbreak. In the questionnaire, we asked the residents who lived in the disaster-stricken area in those days. The topics of questionnaire are the impression of debris removal operation, air pollution by dust, health condition and diseases as to the respiratory system, and so forth. Approximately 90% of the residents lived in dusty air condition than normal, and nearly 50% still have anxiety for their health condition in the future. As to current health condition, almost 10% of them have a bad condition or diseases of the respiratory system and about 1% have asbestos-related diseases. According to this result, debris removal operation of the Great Hanshin-Awaji Earthquake caused dust air pollution and its long term harmful influence.

Second, we have presented the studies of asbestos measure for outbreak earthquake on International Conference on Asbestos Problems at Ritsumeikan University in March 7th-8th, 2015. The subjects of presentations are "Policy as to Asbestos Damage Prevention -How do we deal with this subject on peacetime and earthquake situation", "Local Government Measure Against Asbestos in Japan", "Asbestos Problems of Building Construction in Japan", and "Great Hanshin Earthquake on 1995 and the Present Asbestos Problems" and so forth. These studies will be published by journal paper and/or book.